

2008 年度 I C U 夏期日本語教育 コース報告

コース責任者

C 1		セクション A, B	
Ⅰ 担当講師名			
A: 永富あゆみ（コースヘッド）、室井章子		B: 貴志佳子（コースヘッド）、田中望美	
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数 AB ともに 8 名		AB ともに: 男性 4 名・女性 4 名	
国籍			
A: アメリカ 2 名、中国、中国/カナダ、カナダ、シンガポール、バングラデシュ、メキシコ各 1 名			
B: アメリカ、カナダ 各 2 名 ドイツ、ベルギー、タイ、パキスタン 各 1 名			
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）			
主教材		Japanese for College Students, Basic Vol. 1	
副教材		げんき I, II（抜粋） ようこそ（抜粋） 日本語コミュニケーションゲーム 80 日本語の教え方スーパーキット	
視聴覚教材		Japanese for College Students, Basic Vol. 1（ウェブ） 『上を向いて歩こう』坂本九	
Ⅳ コースの目標			
入門レベルの学習と習得を通し日本についての理解を深める。具体的な目標としては、 聞く：時間、場所、値段など最低限必要な情報の聞き取り 話す：自己紹介、買い物、場所、趣味、日常生活などについて質問、自分のことに関しての短い発表 読む：ひらがな、カタカナ、漢字（約 158 字）で書かれた簡単な読み物の内容をもとに意思疎通をはかる。 書く：ビジターセッション参加者や校外学習協力者へのお礼状を書く。ウェブ（グーグルの地図編集機能）に自分のプロフィール、サマーコース中の行事についての感想などを日本語で載せて編集したものを原稿用紙 2 枚程度にまとめる。			
Ⅴ 評価の基準			
レッスンテスト（口頭試験含む）3 回		40%	
期末試験		20%	
最終口頭発表		15%	
小テスト（ひらがな、カタカナ、漢字、各課の単語テスト）		10%	
宿題（教科書の『フォーメーション』指定部分、お礼の葉書、文化プログラムの講義レポート、グーグルマップへの書込み等）		10%	
授業中のパフォーマンス		5%	

VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
<p>オリエンテーション（主教材の仮名、挨拶等の練習）の後、毎週約2課のペースで進めたが、コースの折り返し地点でAB合同でビジターセッション、校外学習、マルチメディア教室でのワープロ練習を設け、5課までの復習の時間に余裕をもたせるようにした。各課の第1コマに単語テストと英語での文法講義を行い、ドリル（口頭練習約3コマ、新出読み書き1コマ、ロールプレイ及び読み書き復習1コマ）で新出項目の定着をはかった。レッスンテスト当日は1コマ目に復習、2コマ目からAB合同で筆記試験、個別口頭試験という構成をとった。コース後半からは、学んだことを自分でまとめて定期的にウェブ（ゲーグルマップ）に加え、最終発表に向け準備をした。</p>	
VII 授業の内容	
① 聞き	授業の中では特に聞き取り用教材は使わなかったが、教師がビジター役を演じ自己紹介等を行った後、内容について確認する練習を適宜とり入れた。
② 話し	文法講義の授業以外では、日本語のみでの口頭練習及び活動を原則とした。
③ 読み	『日本語の教え方スーパーキット』の教材の他に、広告、時刻表、メニュー等の生教材を活用した。
④ 書き	校外学習やビジターセッション協力者への短い手書きのお礼状（色紙、葉書）、ウェブ（ゲーグルマップ）への書き込み、原稿用紙の使い方の練習等で最終発表の原稿の準備を進めた。
VIII 校外学習	
日 時	7月25日（金）
行 き 先	小金井神社境内弓道場
活動内容	<p>小金井神社境内の弓道場の方々のご好意により、初心者向け特別講習を設けていただくことができた。準備として、道場への行き方、挨拶の仕方、説明がわからなかった場合の対処の仕方等を練習し、当日は弓道の基本動作の説明後、的前で立射を行い、翌週、お礼状を書いたり、校外学習の感想をまとめたりした。</p>
IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
<p>A: 体調の思わしくない学生への細やかな気遣いが見られ、国籍、性別、年齢、奨学生、長期留学予定者等、様々な学生の集まりの中にまとまりがあった。遅刻が多い学生や宿題の完成度にむらのある学生もいたが、励まし合い、六週間のまとめとして作文と口頭発表を終えた時の充実感はひとしおだったようである。（永富）</p> <p>B: ロータリー奨学金生2人、ICUに残る学生2名、サマーコースだけの学生4名の構成。学習意欲が高く真面目な学生がほとんどだったので、課題も忘れることなく、クイズも毎回努力して取り組み、授業も集中して参加した。遅れをとっている学生に対しても他の学生が指導する場面が多く見られた。学生数が少なかったので教員も一人一人に時間がかけられてよかった。また、文化プログラムの企画に積極的に参加する学生が多く、他の学生のいい刺激となった。週末クラスメートと出かける学生もいて、仲がよかったようだ。ビジターセッションや会話パートナーで出会った日本人との交流も積極的に行った学生もいた。観光も勉強も精一杯こなしたいという学生の中には中盤で</p>	

体調を崩した者もいたが、事務や保健室に丁寧に対応していただき、回復し元気にコースを終了することができた。（貴志）

共通の総括（良かった点）コース中盤以降はフォーメーションの宿題を予習型（文法講義コマ開始時までにはその課のフォーメーションの宿題提出）にしたことにより、自分で教科書の文法説明を読み、またその際に新出単語を文脈の中で覚えるというプロセスができたのはよかった。文法事項を繰り返して練習することができ、定着に役立ったと思う。単語を覚えるのに苦労していた学生から勉強しやすくなったというコメントも出た。

（反省点、今後の課題）

1. コースをより円滑に始めるには、仮名の勉強についての具体的な指示や教科書の事前送付も考慮した方がいいのではないだろうか。仮名を予習してきても2-3週間目位迄は読み書きが思うようにならない現状を考えると、単語の知識がない状態で仮名を覚えるのは大変であろうし、自己流の書きグセをつけてしまう恐れもあるので、recognition に重きを置いて準備しておくような方向が望ましいと感じる。
2. 中盤に復習の時間に余裕を持たせるだけでなく、文法事項が他より特に多い後半の8、9課のコマ数も増やすべきであった。個人指導で効率的に復習のサポートができるような工夫も求められる。
3. 校外学習の道場が神社境内にありイスラム圏の学生への事前配慮や説明が不足していた。
4. 様々な国の学生が集い学び合う貴重な機会を生かすため、グーグルの地図編集機能（グーグルマップ）に自分のプロフィール等、新しく学んだ文法を使って書いた作文を数回に渡って載せていく活動を試みた。最終的に原稿用紙2枚から5枚もの原稿になり、仮名が苦手な学生のメディア・リテラシーの発揮、漢字誤変換から長音等の発音を反省という機会がうまれた反面、字数制限等アップロード上の問題もでてきた。編集すると最終発表の原稿になるという過程の説明をコース初期から明確にし、動画機能まで総動員しお互い載せたものを読んだりコメントを加えたりというインターアクションまで組み込めればよかったと思う。（貴志、永富）

C 2		セクション A, B	
Ⅰ 担当講師名			
河原由祐子（コースヘッド）・村上央己		増田恭子（コースヘッド）・津田麻美	
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数 23 名		男性 13 名・女性 10 名	
国籍			
A：アメリカ 7 名、イギリス 1 名、カナダ 1 名、オーストラリア 1 名、イスラエル 1 名、韓国 1 名			
B：アメリカ 9 名、ドイツ 1 名、香港 1 名			
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）			
主教材		『Japanese for College Students : Basic Vol.2』	
副教材		参考・抜粋『げんき』 自作のハンドアウト	

視聴覚教材	「エリンがちょうせん！日本語できます」（ビデオ） L9, L11～L15, L18, L21 の一部 「ウォーターボーイズ」字幕つき（DVD） 「Japanese for College Students : Basic Vol.2」（ウェブ）（自習用）
IV コースの目標	
初級の中級段階であるこのコースでは基本的な文型、語彙、漢字を習得し、日常生活の様々な場面に必要な日本語運用能力の養成を目標とした。	
V 評価の基準	
語彙クイズ	10%
宿題（フォーメーション・漢字・読解）	10%
作文（5回）	10%
プロジェクト（レポートと発表）	10%
レッスンテスト（4回）	20%
口頭試験（2回）	10%
中間試験	10%
期末試験	20%
VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
1 課につき 5～6 コマ使い、2 課終了ごとにレッスンテストを行った。他の時間は、ビデオ、プロジェクト、文化、ビジターセッションにあてた。 1 課の流れとコマ配分 ①漢字・語彙 ②文法導入と練習 ③読解 ④ロールプレイを含む復習	 1 コマ（2 課まとめて） 3 コマ 1 コマ 1 コマ
VII 授業の内容（「Japanese for College Students : Basic Vol.2」を中心に）	
① 聞き	ビデオを使って、場面に中に出てくるキータームのディクテーションをしたり、内容把握の問題をした。また、語彙クイズでは毎回ディクテーションを、レッスンテスト・中間や期末試験には聴解問題を取り入れた。
② 話し	各課のドリルやペアワーク、ロールプレイで話す練習をし、プロジェクトで口頭発表（一人 3 分程度）をした。また、ビジターセッションでは各課に出てくるトピック（アルバイト・バレンタインデー等）について話し合ったり、作文の朗読（朗読後質疑応答）やことばのゲームなどした。
③ 読み	各課の読解教材を使い、そのテーマについてディスカッション等した。

④ 書き	作文（一回４００字程度）を５回書き、学習した文法・語彙・漢字の定着を目指すとともに、自己表現力を高めるようにした。添削後、書き直しをし、再提出した。またプロジェクトのレポートを書き冊子「吉祥寺のガイドブック」にまとめた。発表のために、写真をたくさん盛り込んだパワーポイントも全員作成した。
Ⅷ 校外学習	
日 時	７月２５日（金）
行 き 先	吉祥寺駅周辺
活動内容	プロジェクトの一環として吉祥寺駅周辺でオリエンテーリングをした。事前にビジターセッションで吉祥寺駅周辺のお店に関する情報を集め、調査したいお店をいくつか絞って計画をたてた。当日は３～４名のグループでいくつかのお店を地図を見ながら周り、お店の人に質問をしたりした。校外学習後、吉祥寺のガイドブックを作成。プロジェクト発表にはビジターの人にもきてもらい、発表後質問をしてもらった。
Ⅸ 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
<p>良かった点：コース開始時、C3 および C1 に移動する学生が C2 に移動してきた学生より多く、学生数が A セクション 12 名、B セクション 11 名でちょうどよいサイズのクラスでスタートできた。各セクションとも雰囲気がよく、まとまりのあるクラスであった。プレースメントの結果からの学力、学習者の母語、出身校、バックグラウンド、男女比などバランスがとれるように二つのセクションに分けたが、全体的に A セクションはこつこつ勉強する学生が、B セクションはのびのびと勉強する学生が多く、最終成績にも若干その違いがあらわれた。また、C2 の文法項目の一部分がある学生にとっては既習項目であったため、学習意欲を損なわないように応用練習をたくさん取り入れ、作文やビジターセッションの時間を活用したことが良かった点に挙げられる。</p> <p>反省点・今後の課題：「エリンがちょうせん！日本語できます」はレベルが適していると判断し聴解教材に選んだが、何度か見ているうちにストーリー性がないためか飽きてきてしまった。そこで、最後のビデオの時間は映画「ウォーターボーイズ」を材料に、主に内容把握の問題を準備し、聴解の授業を行った。学生が身近に感じるストーリーであり、興味深く発展性もあった。このレベルのビデオ教材の選択は難しく、学生の興味に合う教材選びと、どのように授業を展開していくかは今後の課題だと思われる。また、コースの後半に気分転換になるゲームなどもう少し多く取り入れてもよかった。最後に、このコースを途中で辞めてしまった学生（船と陸路でアメリカに帰国することにした学生 2 名）がいたことが残念である。</p>	

C 3		セクション A, B	
Ⅰ 担当講師名			
A：西脇英美（コースヘッド）、保坂明香		B：小松満帆（コースヘッド）、助川愛	
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数	28 名	男性	14 名・女性 14 名
国籍	セクション A：アメリカ 10 名、インド・韓国・スウェーデン・台湾 各 1 名 セクション B：アメリカ 9 名、中国・中国/カナダ・インドネシア・シンガポール・南アフリカ 各 1 名		

Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	『Japanese for College Students, Basic Vol. 3』
副教材	自作プリント 参考・抜粋 『げんきⅡ』、『Situational Functional Japanese, Vol. 3』、『文法が弱いあなたへ』
視聴覚教材	『みんなの日本語初級Ⅱ聴解タスク 25』、『わくわく文法リスニング 99』、『毎日の聞き取り 50 日下 初級』
Ⅳ コースの目標	
初級文型、語彙、漢字 400 字（うち 318 字は既習とする）の習得。日常的な場面は日本語で対応できるようになる。	
Ⅴ 評価の基準	
宿題	1 0 %
作文 第一稿（1%）	1 2 %
第二稿（1%）	
最終稿（10%）	
スピーチ	5 %
小テスト 漢字（10%）	2 0 %
単語（10%）	
ウィークリー・テスト（5 回）	3 5 %
期末試験	1 0 %
口頭試験（中間・期末）	8 %
Ⅵ 授業の構成（1 週間／1 課のうちわけ）	
<p>基本的に 1 つの文法・文型の導入・練習に 1 コマ、漢字と読解に各 1 コマをあてることとした。学生が混乱しやすい文法・文型（例：ために／ように、敬語）の学習後にはまとめと運用練習にさらに 1 コマ設けた。単語テストはその課の単語の量、使用頻度に合わせて 1 課につき 1～2 回、漢字テストは 1 課につき 1 回実施した。</p> <p>毎週金曜日 1 限はその週に学習した内容の試験を行い、翌週の月曜日 1 限に返却、月曜日、火曜日のオフィスアワーにその試験の見直しをした。</p>	
Ⅶ 授業の内容	
① 聞き	基本練習として単純な文、会話の理解を確認する練習、発展練習としてある程度のまとまりのある文章の大意を捉える練習等取り入れた。
② 話し	
③ 読み	
主教材の読み物は精読よりも大意の把握に重点を置いた。時間の余裕がある時は再生練習も行った。この他、文法・文型の発展練習として他教材の読解練習も使用した。	

④ 書き	作文はビジターに聞いた話を書かせた。最終稿の提出の前に二度下書きを提出させ、学生が自力で推敲・訂正できるよう、内容・言語両方についてコードを用いてヒントを与えた。スピーチの原稿については教師が訂正を行い、オフィスアワーで質問に対応するようにした。
VIII 校外学習	
日 時	8月5日(火)
行 き 先	NHK スタジオパーク
活動内容	準備として授業でNHKの代表的な番組を10分程度視聴した。また自分が興味を持った番組や見学して分かったことについて書くよう課題を与えた。当日は館内のイベントに参加、大河ドラマの撮影風景を見学することもできた。アフレコ体験、アナウンサー体験等に積極的に参加する学生もいた。
IX 総括(良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)	
<p>・プレースメントについて</p> <p>レベルを移動したいと希望する学生が非常に多く、学生が決まるのに1週間を要した。母国で初級文法を一通り学習しており、主教材をぱっと見て全て既習であると思ってしまい、上のレベルへ移動したいと希望する者が続出した。しかし運用能力が全く伴っていない者がほとんどで、実際に移動できたのは数名であった。こういったことから、当初2つのセクションは単純に学生を二分する予定であったが、Aセクションには初級文法を学習しており、運用練習を希望する学生、Bセクションにはこのレベルの文法項目を初めて学習する学生、あるいは基礎からやり直したほうが良いと思われる学生を集めることとした。この措置は学生、教師双方に良い効果をもたらしたと思われる。Aセクションに入った学生の中には、初めはまだ不満そうであったものの、授業が進むにつれ、自分の不十分であった点に気づき、真剣に取り組むようになり、運用能力が飛躍的に伸びた学生も見られた。Bセクションの学生たちは、妙なプレッシャーを感じることなく、落ち着いて学習を進められるようになったと思う。また教師にとっても両セクションの基本的な足並みは揃えながらも、各セクションの学生に必要な練習に時間をかけることができ、満足のいく授業展開が可能となった。</p> <p>今後もこのレベルではプレースメントに関する問題は避けられないと思われる。対策として、プレースメントテストの結果、2セクションでスタートすることに決まった時点で学生の日本語学習歴を調べ、それに従って今回のような目的別のセクションを初めから設置することにはどうだろうか。これによって第1週目の混乱が少しは軽減されるのではないかと思う。</p> <p>・Aセクション</p> <p>上のレベルへ行きたかった気持ちが真面目な授業態度、学習態度となって現れた学生とそうならなかった学生に分かれた。この違いはコース後半から特に顕著になり、そのまま運用能力の伸びの違いになったと思う。授業中の使用言語は日本語としたことについても、最初はとまどっていたものの徐々に慣れていった学生がいた一方で、最後まで英語に頼ったままの学生も見られた。この点に関しては、英語を話せない雰囲気作りに教師も初めからもっと厳しい態度で臨むべきであったと反省させられた。</p>	

授業内容については、運用能力を伸ばす目的で、読解、聴解の発展的な練習も取り入れた。最初に実施した時は全て既習事項で理解しようとしてしまい、お手上げとなる学生がほとんどであった。そのため二回目以降は予測・推測の方法も合わせて指導した。その結果、積極的に予測・推測を行いながら読める、あるいは聞けるようになった学生もいた。こういった練習を通じて培われる技能は中級以降非常に重要となってくる。時間的制約の中でどう取り入れてゆくか、今後の課題として考えたい。(西脇)

・B セクション

B セクションは、学習項目が既習ではあるが運用能力に欠けている学生と、未習の学生とが混在していたが、あくまで未習の学生に合わせてスタートした。そのため、既習の学生の中には、初めは不満を持っていた学生もいたようだが、文型の導入に加え、運用練習を多めに取り入れるようにすると、徐々にその不満も解消されていった。また、きちんと導入することで、既習の学生も未習の学生も着実に積み上げることができた。

全体的に明るく元気な学生が多く、前向きかつ積極的に学習するクラスであった。年齢も背景も学習歴もさまざまな学生がいたことで、クラスのまとまりがなくなってしまうのではないかと心配もあったが、逆にお互いに助け合い、影響し合い、とてもいい雰囲気の中で学習することができたと思う。

すでに述べたように、既習の学生がいたわけだが、いかにかれらの意欲を削がずクラスを進めるかというのが、コース全体を通しての今回の課題であったように思う。「知っている」ことと「使う」こととの違いを、なかなかかれらに伝えることができなかったのが、今後の課題としたい。(以上 小松)

C 4	セクション A, B
I 担当講師名	
A: 萩原章子 (コースヘッド)、松本明子	B: 目黒秋子 (コースヘッド)、藤原ゆかり
II 学生のうちわけ	
学生数	
A: 12名	A: 男性 7名・女性 5名
B: 13名	B: 男性 9名・女性 4名
国籍	
アメリカ人 13名、韓国人 3名、カナダ人 2名、日本/アメリカ 2名、日本/中国 1名、日本 1名、アルゼンチン人 1名、フランス人 1名、スイス人 1名	
III 教材 (書名、扱った課の番号など)	
主教材	『アルバイト』(コピー教材) 『日本語中級 J-301』スリーエーネットワーク (第3課～10課) 『ICU 中級コース 漢字1』
副教材	読み物 星新一『悪魔』、レベル別日本語多読ライブラリー4『雪女』、『地球温暖化』(ウェブ教材)、『日本語中級用速読用文化エピソード』(凡人社)より 「8. おじぎのいろいろ」、「10. 夕食に呼ばれて」、「73. 満員電車で」、その他自作教材

視聴覚教材	聞き取り 『毎日の聞き取りプラス40』(上)(下) 凡人社、『毎日の聞き取り50』(上)(下) 凡人社、『初級からの日本語スピーチ』 凡人社 DVD 『オレンジデイズ』『電車男』『山田太郎物語』 歌 『そばにいるね』 青山テルマ、『Winding road』 絢香 x コブクロ、『上を向いて歩こう』 坂本九
Ⅳ コースの目標	
(1) 新しい文法、表現、言葉、漢字を勉強し、正確に聞いたり、話したり、読んだり、書いたりできるようになる。 (2) プロジェクト「日本・日本人・日本文化について」を完成させる。ここでは、サマーコースで勉強した文法、表現、言葉、漢字を使いながら、正しい文体で、つながりのある文を作る。意見、感想などをまとめて発表する。 (3) 日本人とのコミュニケーション、または、メディアを通して、日本事情、日本文化について学ぶ。	
Ⅴ 評価の基準	
① 授業参加	10%
② 宿題	15%
③ 小テスト(単語・漢字)	10%
④ 作文(4回)	10%
⑤ スピーチ(3回)	5%
⑥ レッスンテスト(3回、オーラル1)	20%
⑦ プロジェクト(プレゼンテーション)	15%
⑧ 期末試験(筆記、オーラル)	15%
Ⅵ 授業の構成(1週間／1課のうちわけ)	
①その課の漢字ワークシート・文法ワークシートを宿題としてやる(予習として)。 ②その課の漢字・単語クイズを行う。 ③その課で扱う語彙・漢字・文法項目の確認・練習を行う。 ④その課の本文を読む(予習してきて、授業内で確認) ⑤本文について文章の型、Q&Aを確認する。 ⑥その課のことばのネットワークを確認する。 ⑦その課の「話してみよう」や「書いてみよう」関連で、話す活動など行う。 その他、聞き取りの時間、読解練習、スピーチの時間を設けた。さらにプロジェクト(ビジターセッション、作文、スピーチを含む)などを通して、教科書以外に聞く・話す・読む・書く、の4技能を統合して日本語を使う活動を行った。	
Ⅶ 授業の内容	
① 聞き	教科書とテーマが関連しているいくつかの話題を選び内容把握の練習を行った。今後 C4レベルの学生がさらに力を伸ばすためにはもっとディクテーションなど含めた聴解を

② 話し	取り入れたほうが良いと思われる。
③ 読み	主にスピーチを中心に行った。大きい声で話す、聞き手をみながら話す、聞き手が知らない言葉はカードなどを用いてわかるようにする、などの工夫をさせた。もっと敬語で話す練習等も取り入れたほうがよかった。
④ 書き	教科書以外にも、短い読み物を適宜とり入れた。今後の読解力向上のために、名詞修飾節の探し方など重点的に行った。また、漢字判別するタスクや、新出漢字を見せて組み合わせ漢字熟語を作成させるなど、漢字識別力を高めることを試みた。 教科書で新しく習った比較的高度な文型を用いての文章を書かせることを試みた。フローチャートに基づいて文の構成を意識させるようにした。
VIII 校外学習	
日 時	7月31日(木) 9:30-12:00
行 き 先	江戸東京たてもの園(武蔵小金井)
活動内容	藍染め体験：日本文化体験を目的として、江戸東京たてもの園にて藍染め体験を行った。ボランティアの方のご指導をもとに、ひとり一枚ハンカチに藍染めを施した。参加型でひとりひとり違った模様を作れることもあり、学生たちはかなり楽しんで藍染に取り組んでいた。藍染め体験後は自由行動で江戸東京たてもの園の見学もした。
IX 総括(良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)	
<p>C4は2セクション(12名ずつ)でコース運営を行った。学生は計24名であったが、コース途中で個人的な都合により出席できなくなった学生がおり、コース終了時にセクションAは11名、セクションBは10名となった。大部分の学生は予習や家庭での学習にきちんと取り組んでおり、毎日の学習を積み上げ、日本語能力が伸びている様子が見られた。あまり学習に真剣に取り組まず、実力が伸びていないような学生はごく一部だった。</p> <p>コース全体を通して、学習者全員が「日本・日本人・日本文化」についてのテーマを選んで、インタビュープロジェクトに取り組んだ。インタビューの対象者として、ビジターセッション中に学習者とはほぼ同数の日本人ボランティアに2回ほど来てもらい、効率的にインタビューが行えた。学生たちも実際に日本人ボランティアと自分の興味のあるテーマについて話せて、インタビューを楽しんでいたようである。このプロジェクトでは、テーマの設定から日本・日本人・日本文化について自分の持つ知識から考えた仮説、それに基づいたインタビュー質問、データから表やチャートを作りその説明の仕方、インタビュー結果そしてそれから導かれる結論の述べ方など、段階的に課題を与え、最終的に発表ができるように計画した。そのため、無理なくプロジェクト達成のために必要な日本語が学習することができたと言える。</p> <p>今後このレベルの学生の能力をさらに高めるためには、さらに教科書以外の聴解、読解教材を適宜取り入れる工夫が必要だと思われる。</p> <p>今回、継承語学習者の学生が2名いたが、それら学生はやはり漢字が弱く、教科書の読みや文型の学習の時にも支障をきたしていた。一方で、聞き取りやプロジェクトなどに関しては会話や聴解能力が他の学生より優れていたため、最終的にはバランスがとれていたと思う。継承語話者にとって文法などすでに知っている(やさしすぎる)項目と漢字や読み、書きに関連する弱い部分とが混在するので、やさしすぎる、</p>	

または、難しすぎると感じてやる気を失うという可能性も考えられる。いずれにしても、継承語話者にはさらなる配慮や対策が必要であろう。特に敬語の練習など取り入れれば有益だったのではと思われる。来年以降話し書きの練習に積極的に敬語の練習を取り入れることが望まれる。

C 5	
Ⅰ 担当講師名	
横田淑子（コースヘッド）	新井優子
Ⅱ 学生のうちわけ	
学生数	14名 男性 5名・女性 9名
国籍 アメリカ 11名、ドイツ 2名、日本/カナダ 1名	
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	『日本語中級501』第1課～第6課 スリーエーネットワーク 『ICU 中級コース2 漢字』ICU
副教材	『中・上級者のための速読の日本語』The Japan Times
視聴覚教材	『新毎日の聞き取り50日（上）』 凡人社 ビデオ：「さくら」「ウォーターボーイズ」 テレビ番組：ドラマ「世にも奇妙な物語」
Ⅳ コースの目標	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 約200字の漢字、37の文型が使えるようになる。 ・ 様々なトピック、スタイルの読み物が読めるようになる。 ・ 自然な速度の日本語を聞いて、必要な情報が取れるようになる。 ・ 読んだり聞いたりしたものについて、自分の考えや感想を的確な表現を使って話したり書いたりすることができるようになる。 ・ プロジェクトを通して、論理的思考力と批判的思考力を養う。 	
Ⅴ 評価の基準	
テスト1&2	20%
期末試験	15%
話す力（スピーチ）	15%
聞く力（テスト）	10%
作文（クラス内作文）	10%
小テスト（漢字、単語、文法）	10%
宿題	10%
プロジェクト（レポート、発表）	10%
Ⅵ 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
週に1課のペースで、進めた。予習（漢字、文法、語彙、読解、話	

<p>してみよう)と復習(文法、読解)の宿題を課し、漢字、単語、文法の小テストに加え、2週間に一度レッスンテストとスピーチを行い、学習内容の定着を図った。スケジュールは、週により多少異なるが、およそ次のように行った。</p>	
教科書 漢字	1 コマ
文法	1 コマ
本文読解	2 コマ
ことばのネットワーク	1 コマ
話してみよう	1 コマ
その他 スピーチ	2 週に 1 コマ
作文	1 コマ
速読	1 コマ
リスニング (ビデオ、CD)	2 コマ
プロジェクト	1 コマ
VII 授業の内容	
① 聞き	ビデオ教材は主に大意取りと日本文化の紹介、それに伴う意見交換の目的で使用し、CD教材は、学生にコピーを貸し出して、内容理解および表現の的確な聞き取りの目的で使用した。その他、授業中の教師の説明やクラスメートのスピーチ、プロジェクトの発表、ビジターとの会話、文化プログラムのレクチャー、校外学習でのガイドの説明を聞き取るなど、様々な場面で聞く機会を設けた。
② 話し	毎週、テーマにそって作ったメモにしたがってディスカッションを行った。又、各自で選んだ「ニュース：日本の社会の問題」と「好きな本、映画」についての作文をもとに、スピーチをさせ、コースの最終日にはプロジェクトの発表をさせた。校外学習と文化プログラムについても、個人指導の時間にレポートさせた。
③ 読み	教科書の本文を精読したのに加え、速読用の読み物や被爆者証言、エッセイ、ショートショートを扱った。毎回、予習時に本文についての質問を作らせ、本文精読の後で内容についてのディスカッションを行い、宿題のワークシートによって、内容理解の確認を行った。
④ 書き	作文は、説明文、意見文のジャンルで、内容、構成、表現について書き方を指導したあと、クラス内で原稿用紙600字～800字を目標に書かせた。毎週個人指導の時間にフィードバックを行い、その内2回はスピーチの指導につなげた。さらにコースプロジェクトとして各自が選んだ日本文化に関するトピックについてリサーチさせ、1500字程度のレポートを課した。
VIII 校外学習	
日 時	7月25日(金)
行 き 先	江戸東京博物館

活動内容	当日は現地集合で、一人の学生が20分ほど遅れた。2つのグループに分かれて、ボランティアガイドの日本語での説明を聞きながら、江戸社会（地理、貨幣制度、出版と本屋、大名屋敷、庶民の暮らし、火消しの役割、治水のシステムなど）について学んだ。後日の、校外学習についての個人別のレポートでは、学生のほとんどが良い展示物がたくさんあり、行く価値があったと感想を述べていた。
------	--

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

良かった点

- ・ 学生一人一人のモチベーションが高く、熱心に取り組んでいた。
- ・ 作文とスピーチをリンクさせたので、学生の中で作文を自分で推敲し、吟味することができたのではないと思う。
- ・ 個人指導の時間を効果的に使って、作文のフィードバック、プロジェクトの準備をすることが出来たのは良かった。
- ・ 学んだことを使おうという意識が見られ、教科書の表現を積極的にディカッションや作文に産出していた。
- ・ 会話ボランティアに入ってもらいと、学習者にとってその授業準備の動機付けにもなり、活動自体も充実していた。授業後に連絡先交換などをして、日本での経験、交流を広げようとする姿も見られた。
- ・ プロジェクトで学生が選択したトピックは多様で、それぞれの学生が興味を持って取り組み、最終日のパワーポイントを用いたプレゼンテーションは、どれもすばらしかった。この活動を通して、与える課題次第で日本語のクラスでも学生の批判的思考力を高めることは可能であることが示せたと思うし、学生が日本語を使って知的に高度なレポートが発表できたことは、彼らの自信につながるだろうと思われる。

反省点、今後の課題

- ・ 速読の時間が効果的に使えなかった。実践に重点を置いたが、もっと段階的に読み方を学んで、基礎から積み上げて行く努力が必要だったのかもしれない。
- ・ 学生数が多く、学生との接点も少なかったため、学生の状態を十分に測りきれなかった。

C6	
I 担当講師名	
黒川直子（コースヘッド）	荒木田京美
II 学生のうちわけ	
学生数	8 名 男性 6 名 ・ 女性 2 名
国籍	アメリカ 5 名（日系 1 名、韓国系 1 名）台湾/アメリカ 2 名 香港 1 名
III 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	『日本語中級 J5 0 1』第7課～第10課 『日本語中級 J5 0 1』に付随する漢字テキスト（ICU 作成）

副教材	『日本語生中継 初中級編』（抜粋） 『留学生の日本語 作文編』（抜粋） 『中・上級者のための速読の日本語』（抜粋） 『にほんご敬語トレーニング』（抜粋） 『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』（抜粋） 「駄目になった王国」（村上春樹）「オンリー・ミー」（三谷幸喜） 「佐賀のがばいばあちゃん」（島田洋七）「恋空」（美嘉） 「蜘蛛の糸」（芥川龍之介）他 新聞記事などの生教材
視聴覚教材	ビデオ（テレビ対談番組、ドキュメンタリーなど） 映画 『12人の優しい日本人』 NHK ビデオ『プロジェクト X』『プロフェッショナル 仕事の流儀』 『ご近所の底力』ドラマ『恋空』他

IV コースの目標

四技能を伸ばしながら日本への理解を深め、上級レベルにスムーズに移行できる実力を身につけることを最終目標とした。具体的には下記の通りである。

- （１）漢字や単語の知識を拡充し、正しく使えるようになる。
- （２）既習の文法や表現を整理し、新たな表現を学ぶ。
- （３）状況や相手に応じて、適当なスタイルの自然な言語が使える。
- （４）話し言葉と書き言葉の使い分けができる。
- （５）様々な接続詞を使って、段落レベルで話ができる。
- （６）自分の意見や考えなどが分かりやすく相手に伝えられる。
- （７）自然な早さの生の日本語を聞き取る力をつける。
- （８）新聞記事や小説などの読み物の内容を推測しながら読める。
- （９）分かりやすく構成のしっかりした論文が適切な文体で書ける。

V 評価の基準

出席・授業参加	15%
作文・宿題	15%
漢字・単語小テスト	10%
口頭発表（５回）	10%
レッスンテスト（４回）	20%
期末試験	20%
研究プロジェクト（論文・発表）	10%

授業の構成（１週間／１課のうちわけ）

主に教科書のトピックに関連するビデオや読解資料と合わせて一週間で一課のペースで進めた。毎日の漢字・単語の小テストに加え週に一度レッスンテストと口頭発表を行い、学習内容の定着を図った。コース終盤は小説や新聞記事などの生教材を使用。スケジュールは週によって異なるが、およそ以下の内訳で行った。

教科書	本文読解	2 コマ
	文法	1－2 コマ
	速読（練習 B）	1 コマ
	語彙（ことばのネットワーク）	1 コマ
	ディスカッション（書いてみよう）	1 コマ
	口頭発表	2 コマ
その他	読解（生教材など）	2 コマ
	ビデオ	1－2 コマ
	聞き取り・会話	1－2 コマ
	作文	1 コマ
	速読	1 コマ
	既習文法・表現の復習等	1 コマ

Ⅶ 授業の内容		
① 聞き	『日本語生中継』を使用した聞き取り練習の他、ドキュメンタリー番組や映画などのビデオ教材を内容の理解とともに意見交換を行うことを目的に使用。その他ビジターへのインタビュー、校外学習活動でのガイドの案内の理解等。	
② 話し	毎日の授業でのディスカッションに加え、ビジターとの話し合い、場面に応じた表現の習得を目的としたロールプレイ等の練習を行った。さらに自分の興味のあるテーマについてのスピーチ（各自 2 回ずつ）、テーマに関する口頭発表（5 回）、研究プロジェクトの発表などの機会を設けた。また、ディベートや紙芝居形式のストーリーの説明なども行った。	
③ 読み	教科書の本文に加え、新聞記事や短編小説等の読解資料を扱った。事前に内容質問などの課題を行って授業に臨む精読と、その場で大意をつかむ速読と合わせて行った。	
④ 書き	書き言葉の習得や構成力の向上を目的として、週に一度作文の時間を設け指導を行った。また読解授業の予習、ビデオ視聴後の復習、週ごとのテーマ作文など、毎日書く課題を与えた。更にコースのプロジェクトとして自ら選んだテーマについて 5－7 枚程度の研究レポートを書かせた。	

Ⅷ 校外学習		
日 時	8 月 1 日（金）	
行 き 先	江戸東京博物館	
活動内容	博物館のボランティアガイドの説明を聞きながら江戸ゾーンを中心に見学した。事前に配布したワークシートに基づき、説明を聞きながら情報を記入すべく皆注意深く説明に耳を傾けていた。さらに展示物の中で興味を持ったものについて発表するという課題を与えてあったため、各自熱心に見学し調査を行っていた。翌週の授業では歌舞伎を始め、当時の楽器や身分制度まで様々なテーマでの発表や話し合いが行われ、江戸時代の暮らしや制度についての理解を深めることが出来た。	

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

学習意欲が高く知的好奇心が旺盛な学生達に恵まれ、気持ちよく授業ができるクラスであった。授業での討論には全員が積極的に参加し、終始和気藹々とした雰囲気であった。学生同士の仲もよく、教師を介さず率直に意見を言い合ったり間違いを直し合ったりできる協同学習の場としてのコミュニティが形成されていたようである。体調不良で一日休んだ学生以外は全員100%の出席率で、最後までいい意味での緊張感が持続したと思う。

今年のC6はC5の許容人数の制限などの理由からレベルがやや下の学生を交えてのスタートとなった。そのため、基礎を固めることを目標に既習文法の復習をある程度時間をかけて行った。一方でスムーズに上級レベルに移行できるよう、新聞記事、短編小説、ケータイ小説、映画やテレビ番組等様々なジャンルの生教材を取り入れるようにした。これらの教科書以外の教材は概ね学生に知的な刺激を与え、活発な討論を促すことができるものであったと思う。

今回は特に作文の指導に重点を置き、書き言葉の習得や構成力の向上を目指す所謂「アカデミック・ジャパニーズ」の授業を定期的に行った。毎週与えた作文の課題においては書き直しの作業を徹底して行い、日々の宿題の中でも文体に注意を払うよう重ねて指導した。学生の書く能力は目に見えて進歩し、学生自身からも「きちんとした書き言葉を学ぶことができて嬉しい」とのコメントが寄せられた。また書かせた作文は全て話し言葉で口頭発表する機会を与え、文体の使い分けができるよう指導した。その他、毎日交代で行った3分スピーチ等口頭発表の機会を多く設け、なるべく細かいフィードバックを与えるようにした。このコースの集大成である研究プロジェクトの論文及び口頭発表はそれぞれの学生の6週間の成長を感じさせられるものであった。

反省点としては、レベルが下の学生への指導の時間が十分ではなかった点が挙げられる。授業での既習文法の復習と並行し、特に基礎が弱い二人の学生には個別指導でも初級文法の復習などをするよう努めたが、レポートの指導などを行いながら十分な復習を行うのは時間的に厳しいものがあつた。プレースメントの段階で適切なレベルのコースに入れることが最善の解決法であろうが、サマーコースの制約上このように本来のレベルと違ったコースに入れざるを得ないというケースは今後もあると思われ、限られた時間内でどのような対応をすべきか検討が必要であろう。

そのような課題は残るものの、全般的にはそれぞれの学生がある程度の自信と達成感を持ってコースを終えることができたのではないかと思う。6週間常に前向きな姿勢で学習に取り組んでくれた学生達に感謝している。

C 7	
I 担当講師名	
数野 恵理（コースヘッド）	高田 裕子
II 学生のうちわけ	
学生数	4 名
男性	2 名・女性 2 名
国籍	
ドイツ 3 名、アメリカ 1 名	

Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	「どんな時どう使う 日本語表現文型 500 中・上級」第1～30課、日本語能力試験2級文型のうちC4, 5, 6で未習の60の文型
副教材	<p><u>書籍</u></p> <p>『プロ論』『働くことがイヤになったとき』養老孟司</p> <p>『留学日記』『ボランティア事始め』岩本悠</p> <p>『映し世のうしろ姿』『困った謝罪癖』藤原新也</p> <p>『こうばしい日々』『メロン』江國香織</p> <p>『どうせの丸かじり』『スティックを食べよう』東海林さだお</p> <p>『ケータイ世界の子どもたち』『ネットいじめの実態』藤川大祐</p> <p>『デッドエンドの思い出』『あったかくなんかない』よしもとばなな</p> <p>「蜘蛛の糸」芥川龍之介</p> <p>『地球のささやき』『“私”から“我々”へ』龍村仁</p> <p>『日本の論点』『子供たちは毎日どんな食事をしているのか？』『なぜブログやSNSが急成長したのか』</p> <p><u>新聞記事</u></p> <p>「社説 洞爺湖サミット」「キャンパー 添加物使用に警鐘」「子どもとゲーム」「生きる自信を持てるなら」</p> <p><u>教科書</u></p> <p>『アカデミックジャパニーズ』</p> <p>『トピックによる日本語総合演習 上級用資料集 第2版』</p> <p><u>インターネット</u></p> <p>『ICU Web Campus』『卒業生は今』 稲田菜穂子</p> <p>『異国の客』『二十歳の頃、町の事件、異国としての日本』池澤夏樹</p>
視聴覚教材	<p>「世にも奇妙な物語：レンタル・ラブ」</p> <p>「フード・マイレージ」</p> <p>「NHK週刊ニュース：サミット直前 最大級の警備」</p> <p>「プロフェッショナル仕事の流儀：アートディレクター佐藤可士和」</p> <p>「リビング・スタイル： 大人のメディアリテラシー」</p> <p>「ラジオ版 学問のススメ」</p> <p>「アカデミックスキルを身につける 聴解・発表ワークブック」</p>
Ⅳ コースの目標	
「読む」「書く」「聞く」「話す」の四つの技能において、日本語母語話者により近いレベルに到達し、日本語で行われる大学の授業に参加できるようになることを目指す。	

V 評価の基準	
<u>読み書き</u> (60%)	
読解宿題・漢字語彙小テスト	10%
文型宿題・文型小テスト	10%
プロジェクト・レポート	10%
作文(作文2, 3, ブログ, 試験)	中間・10%
期末試験(漢字・語彙, 表現文型, 読解)	20%
<u>聞き話し</u> (40%)	
リスニング (ワークシート・試験)	15%
プロジェクト発表	5%
話し方(スピーチ・スピーチ試験・討論・討論試験・ ディベート・インタビュー試験)	20%
VI 授業の構成(1週間/1課のうちわけ)	
読解	3~4コマ
速読	1コマ
表現文型	2コマ
作文	1コマ
プロジェクト	1コマ
スピーチ	1コマ
討論(ビジターセッション)	1コマ
リスニング	2コマ
VII 授業の内容	
① 聞き	ニュース、ドキュメンタリー、ドラマ、対談、講義などを正確に理解し、その内容を要約したり意見や批評を述べたりした。また、話を聞きながらノートをとる練習もした。
② 話し	討論のクラスでは毎回ボランティアの日本人学生に来てもらい、日本人の発言を理解できるようにした。
③ 読み	読解や聴解の授業で意見を述べたり、質問をしたりした。読解・聴解の授業で扱ったテーマに関して、後日スピーチ、討論、ディベートをした。また、各自関心のあるアカデミックなテーマについてパワーポイントを用いて20分程度の発表をした。
	新聞記事、雑誌記事、評論、エッセイ、短編小説など異なる文体の文章を精読し、内容を正確に理解し、要約したり意見や批評を述べたりする練習をした。漢字・語彙の授業は行わず、授業翌日に読解教材にでてきた漢字・語彙のクイズを行った。速読の時間には、辞書を用いなくて読む練習も行った。
	また、インターネットで文章を読むときに、漢字に振り仮名を振ったり、単語の意味を表示させる機能を利用できるようにした。

④ 書き	書き言葉、レポートの書き方を学び、作文とレポート（５０００字程度）を書いた。また、ブログを通して、カジュアルな日本語で書く練習もした。漢字は読解教材にでてきたもののうち、１８０の言葉が書けるようにした。
Ⅷ 校外学習	
日 時	７月１８日 金曜日
行 き 先	相田みつを美術館（有楽町駅徒歩１分 国際フォーラム）
活動内容	館内をまわり、詩を読んだり、映像を見たりした。そのあと、筆ペンで詩の書き写しをしたり、感想文を美術館に提出したりした。また、学芸員と館長からも話を聞いた。
Ⅸ 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
<p><良かった点></p> <p>４人という少人数のクラスだったが、熱心な学生が集まった。全員が毎時間きちんと予習をしてきて、積極的に質問をしたり、意見を述べたりし、活気のあるクラスとなった。</p> <p>Ｃ７では週ごとにテーマを決め、授業を進めたが、全体を通して読解・聴解教材は学生の興味を引くことができた。特に、食品添加物やフード・マイレージは、ほとんど学生が初めて知る内容だったこともあり、新しい知識を得るための道具として日本語を使うことができ、学習意欲が上がったというコメントがあった。</p> <p>聴解は、今年ＩＬＣ工事のため例年のように授業時間内にビデオやＤＶＤをカセットテープに録音して各自のペースで聞かせることができなかったが、それに代わるものとしてコース後半はインターネットラジオを聞く授業を組み込んだ。ＭＰ３としてパソコンにダウンロードできるので、帰宅後や通学中にも繰り返し聴けてよかったようだ。このようなサイトを紹介しておくことは、帰国後に聴解の練習が続けられるという点でも意味があったと思われる。また、上級学習者でも男性の日本語が聞き取りにくいという意見をよく耳にするので、男性が出演しているドキュメンタリー番組や対談を意識的に選んだ。やはり、聞き取るのは難しかったようだが、学生もこのような練習の必要性を感じていた。</p> <p>校外活動は昨年のＣ６で「相田みつを美術館」が好評だったので、今年のＣ７も同様にした。日本語で詩を鑑賞できるとは思っていなかった、詩が心に響いた、貴重な体験ができたなど、全員が満足していた。中上級の学習者にとっては総合的に日本語が使えるよい場だったと言えるだろう。</p> <p><反省点・今後の課題></p> <p>プロジェクトでは、各自関心のある分野について調べたことをレポートに書かせたが、６週間という限られた期間で通常の宿題もあるなかレポートを書くというのは想像以上に大変な作業だったようだ。昨年のＣ７の報告書にも時間が足りないという指摘があったので、今年は文字数を５０００字に抑え、負担を軽減したつもりだったが、学生によると文字数はあまり問題ではなく、短期間での資料探しと情報収集が大変だったということだ。すでに母語で勉強していたテーマで参考文献のリストが手元にある学生はまだしも、一から始めた学生は時間的にかなり厳しく、睡眠時間を削って書かざるを得なかったようだ。また、残念なことに、プロジェクト自体をあきらめてしまった学生も１名いた。しかし、最後まで書き終えた学生たちは、自分の専門分野についてレポートを書けたことに大きな達成感を感じており、プロジェクトの価値を見出していた。とはいえ、６週間で資料を探し、そこから使えるものを選ぶというのはかなり時間</p>	

を要する作業であるため、今後はインタビュー・プロジェクトのような形式に変え、資料を探す手間をなくす工夫が必要だ。

また、プロジェクト以外の課題（宿題やクイズのための勉強）も量がかなり多いので、これも検討が必要だ。コースの途中からは、語彙リストにあらかじめ英訳を付けるなどし、予習にかかる時間を短縮する工夫もしたが、それでも覚える語彙の量が多すぎて、特に期末試験では出題範囲となる語彙が膨大な量になってしまった。討論や作文で新出語彙を積極的に使うことで重要語彙は定着したが、クイズのために覚えたあとは記憶に残らない語彙も多かった。プロジェクトのことも考慮すると、クイズや試験に出題する語彙の量を抑え、学生の負担を軽減したほうが学習効果は上がるのではないと思われる。

C 8	
Ⅰ 担当講師名	
豊田悦子（コースヘッド）	江原有輝子
Ⅱ 学生のうちわけ	
学生数	8 名
男性	6 名・女性 2 名
国籍：日本、アメリカ、韓国、台湾	
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	Kanji in Context Workbook Vol 1 本：『ちびまる子ちゃん』『おっちゃんのまほうのカードの巻』さくらももこ 『もものかんづめ』『恐怖との直面』さくらももこ 『坊ちゃん』夏目漱石 『民話と深層心理』 新聞：「だれでもよかった 秋葉原通り魔事件」「通勤バス派遣村行き」「仕事増え悩み深刻 心を病む先生たち」「食、運動・・・根づく健康志向」「深夜のコンビニの是非は」
副教材	『どんな時どう使う日本語表現文型 500』 『大学生と留学生のための論文ワークブック』 『日本語の書き方ハンドブック』 『国際化、情報化社会に向けての表現技術 1, 2』
視聴覚教材	クローズアップ現代「千と千尋の神隠し」 「フリーター支援会社」「物知り一夜漬け携帯電話」「学校を変えるのは誰だ」 土曜インタビュー「旭山動物園」「ボクらの時代」（養老孟司他） 地球データマップ「進む温暖化」「夏目漱石の生い立ち」「I speak ことわざビデオ」
Ⅳ コースの目標	
新聞記事、論文、小説を読んだり、ドラマ、ドキュメンタリーを 視聴することにより、日本語、そして、日本社会および日本人の生活に対する認識と理解を深め、また、それらについて、適切な日本語で意見を述べられるようにする。	

Ⅴ 評価の基準	
試験	35%
中間試験（15%）	
期末試験（20%）	
漢字語彙クイズ	20%
発表、討論など	10%
作文	10%
個人プロジェクト	25%
発表（10%）	
小論文（15%）	
Ⅵ 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
漢字語彙導入／クイズ	4 コマ
聴解	2 コマ
読解	2 コマ
話し合い／発表	2 コマ
作文	2 コマ
プロジェクト	2 コマ
表現技術	1 コマ
ビジターセッション	（1 コマ）
試験や校外学習などのスケジュールにより、週によって多少の違いがあった。	
Ⅶ 授業の内容	
① 聞き	コース目標を達成するために、4 技能について以下のような活動を実施した。
② 話し	ドキュメンタリー、情報番組、映画などを視聴し、グローバル情報及びローカル情報を正確に聞き取る練習を行った。語彙、表現の意味と使い方を確認した。
③ 読み	読解、聴解活動を通して理解したものをベースにして、適切な語彙や表現を使いながら意見を述べたり議論し合ったりした。
④ 書き	新聞記事、評論、エッセイ、文学作品など、さまざまなジャンルの読み物に触れ、読解活動を通して理解したものについて要約したり、自分の意見を述べたり、議論したりした。
	読解、聴解活動を通して理解したものをベースにして、新しい語彙や表現を使いながら自分の意見をまとめて述べる練習をした。長い文の要約法、話し言葉と書き言葉の違い、論文の書き方、事実文と意見文の違いについて指導した。
	個別指導の時間には、作文の添削、指導を行った。
⑤ 漢字	Kanji in Context を使用して、漢字語彙の読み、意味を提示した。一回に 5 課学習し、翌日、クイズを行った。6 週間で part 1 一冊を終了した。

Ⅷ 校外学習	
日 時	8月1日（金）
行 き 先	新宿歴史博物館
活動内容	<p>博物館のツアーを予約しておき、説明を聞きながら館内を見学した。新宿エリアで発掘品、地図、復元家屋などの見学を通して、江戸時代から昭和初期までの移り変わりを実物を見ながら、学習した。この博物館を選んだ理由は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 校外学習の週に夏目漱石の作品を授業で取り上げており、この博物館に漱石関連の展示があること。 ・ 実物を見て体験的に学習できること。 ・ 中規模で、見学が容易であること。 ・ 大学からあまり遠くないこと。
Ⅸ 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
<p>よい点：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 多様な学習活動ができた。 ・ 学習者の一人一人が、自分の日本語の得意な点・苦手な点を自覚することができた。 ・ 漢字語彙の学習を通じて、一人一人が、各自の漢字語彙の増強を実感することができた。 ・ これまで認識していなかった、書き言葉と話し言葉の違いに気づき、作文の際に意識して書き言葉を使用できるようになった。 ・ 似たような背景を持つ学習者が集まったことにより、一人一人の学習者が、日本語学習上の、肯定的な刺激を受けることができた。 <p>特色ある活動：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生のニーズや日本語力に応じてコースを進行しながら内容を随時変更した。 ・ 個別指導の時間に、個々の学生の弱点と今後の日本語学習の方向性について話し合った。 ・ 書き言葉と話し言葉の違い、事実文と意見文の違いを理解するための学習活動を実施した。 ・ 漢字語彙の集中的な導入・指導に焦点を当てた。 ・ 読解・聴解活動を通して、現代日本のさまざまな問題点について批判的に考える練習を行った。 <p>今後の課題：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ C8に入れる学生は、中級レベルの漢字力・語彙力があることを原則とすべきである。 ・ 兄弟・姉妹は、できる限り別のコースに入れるほうがよい。 ・ 精神年齢のばらつきがありすぎると、クラスのまとまりがなくなるので、注意が必要である。 ・ 学習態度に焦点を当てたガイドラインの提示が必要になる場合もあることを念頭におくべきである。 	